

別府の未来予想図 ONSENツアーリズムのまちづくり

エンタテイメントシティへの第1歩

今年のゴールデンウィーク初日となった4月27日(土)、名物共同浴場・駅前高等温泉や幾筋ものレトロな雰囲気の商品街が交差・展開して人気が高い、JR別府駅から別府港・北浜公園に至る道筋およびその周辺地区に、前日までとはちよっと違う面白い風景が見られた。「Welcome to BEPPU」の文字とともに「ヤッターマン」や「タイムボカン」「みなしごハッチ」などアニメの人気キャラクターを使ったカラフルなポスター、のぼり、顔出しパネルなどを多数設置。家族連れや中高年を中心とする観光客がのんびり歩く伝統的な温泉街の様相が一変して、より華やかでポップな雰囲気を醸し出す演出が随所でなされていたのだ。

別府市は今年4月23日、これまでに数々の人気アニメキャラクターを生み出してきた大

手制作会社・タツノコプロとの提携を発表した。来年3月まで同プロのキャラクターとバーチャルアイドル「初音ミク」とのコラボレーションにより、別府八湯の地域特性を生かしたさまざまな企画(「エンタテイメントシティ・別府」プロジェクト)を展開する計画である。

ゴールデンウィーク初日はそのキックオフイベントとして、中心市街地をタツノコプロの人気キャラクターが席卷したほか、北浜公園では午後2時から浜田博別府市長をはじめとする関係各位の参加の下、別府温泉ファン、アニメファンが全国から多数参加する特設会場において、同プロジェクトの発表会(ウェルカムパーティin別府)が実施された。

全国から訪れた若者や家族連れの観衆が生み出す熱気の中、ウェルカムパーティin別府は浜田市長による「国際観光温泉文化都市・別府市がこれまで以上に楽しいまち、世界に通用するまちを発信するエンタテイメントシ



「エンタテイメントシティ・別府」プロジェクトのウェルカムパーティin別府の様



タツノコプロのキャラクターパネルやフィギュアを展示する商店街スペースでは立命館アジア太平洋大学の女子学生が案内

資金を投入し続けた立志伝中の人物だ。別府温泉の

「別府市の観光客数は近年800万人前後を推移する状況となっています。日本の温泉観光地であるという自負は今も変わりありませんが、この別府のまちをもう一度、根本から活性化したい。その思いで突き進んできた10年でした」(浜田市長)

後に述べるように、エンタテイメントシティ・別府プロジェクトは、浜田市長が陣頭指揮を執って粘り強く推進してきたONSENツアーリズムのまちづくり事業を、さらに全国発信、世界発信するための第一歩なのだ。



市内に130以上ある共同浴場の象徴・竹瓦温泉(別府温泉)

に当たる。油屋熊八翁は自ら経営する亀の井旅館を国際的に通用する近代的なホテルに生まれ変わらせた後、大分・熊本・長崎を結ぶ国際遊覧幹線道路(後の九州横断道路構想の原型)の実現を提唱し、ゴルフ場を建設したほか、自動車会社を立ち上げ、日本初の女性バスガイド付き遊覧バス事業(地獄巡り)をも実現した。さらに関西汽船(旧大阪商船)による瀬戸内海ルートの大分・神戸・別府定期便就航を実現、別府温泉の奥座敷としての由布院温泉開発にも成功するなど、別府温泉および近隣地域の振興のために次々ユニークなアイ

恩人ともいえるべき油屋熊八翁の生誕150年の節目に、改めて別府温泉および別府市の世界発信を宣言した「エンタテイメントシティ・別府」プロジェクトは、まさに油屋熊八翁の衣鉢を継ぐかのような雄大な事業といえる。だが、華やかな仕掛けの陰には、浜田市長が市長就任以来10年間にわたって着々と積み重ねてきた、「ONSENツアーリズムのまちづくり」への深い思いと具体的な事業の蓄積があったことは強調しておくべきであろう。

世界に向け開かれた 国際観光温泉文化都市

昭和初期に一大観光地としての地歩を築いた別府は、その後の歩みを通し、観光地としては既に完成していた感がある。それが別府のイメージの固定化につながり、観光地として安定的な成績は挙げるものの、新たな飛躍を妨げる要因ともなっていた。市長の言葉にもあるようにその間、観光入込客数は漸減の

はまだひろし 浜田博 別府市長



「折しも今年、昭和初期に別府が観光地として初めて積極的に全国発信した際の立役者であり、今も「別府観光の父」と市民から敬愛されている油屋熊八翁の生誕150年の節目(生中継)を通じて広く発信された。



留学生も積極的に参加する別府の新名物「夏の宵まつり」(7月)



油屋熊八翁生誕150年の今年、次代の人材育成を目的とする「油屋熊八中学校」開設が計画中(写真は熊八翁碑前まつり)

道をたどり続けた。

地域の基幹産業である観光の状況に比例して、別府のまち全体に根本からの活性化が必要なのは官民の共通認識だった。しかし、従来のように小手先の観光振興を繰り返すだけでは脱皮はできないことも、官民の共通認識となっていた。

だからこそ、飛躍を図るには行政も民間も市民も一体となった、全市を挙げた取り組みにする必要があった。今まで先人が積み上げてきた地域の財産を生かし、温泉を核とするまちであるという基盤を中心に据えながら、まったく新しい発想での取り組み――。

ツーリズムやグリーンツーリズムが導入されて以降、より幅の広い総合的な概念を持つに至った。どちらも単なる観光振興策ではない。地域ぐるみの取り組みが必要なこと、地域の人々が自分たちの地域の環境の良さを発見・発信するとともに、市外から訪れる人もそれを楽しめるだけでなく保全に協力する。そのような環をを広げることで、経済的な意味をも含めた地域の活性化と環境保全とを両立させる仕組みづくりだ。そこが旧来の単なる観光(物見遊山)とはまったく違う新しい観光(ツーリズム)の概念をもたらしたわけだが、別府市のONSENツーリズムはさらに幅が広い。

そんな観点から浜田市長は、市長就任(平成15年4月)直後の同年10月、各界有識者から成る諮問機関「別府観光推進戦略会議」(座長 立命館アジア太平洋大学・小方昌勝教授)を設置した。そうして約1年間、多角的な観点から議論が尽くされ、同会議が最終的に答申した結論こそ、前述の「ONSENツーリズム」の振興を基盤とする全市を挙げたまちづくり運動なのだった。

なぜ温泉でなくONSENなのか。「一つには温泉をJUDO(柔道)のような世界の共通語にしたいという思いがある」と浜田市長は語る。ご承知のように別府市には立命館アジア太平洋大学、別府大学および別府溝部学園短期大学という、留学生を積極的に受け入れてきた伝統を持つ大学があり、市内には常に世界の80を超える国や地域から訪れた留学生が市民に溶け込み、温泉にも親しみながら生活している。実際、取材中にしばしば、共同浴場で外国人留学生の姿を見た。別府市の人口に対する留学生の占める率は日本トップレベルで、これだけ多数の国から留学生の集まる都市は、世界的にもまれなのではないだろうか。

「源泉数約2500カ所を有するとともに、世界に存在する泉質11種のうち10種が別府八湯にはあります。別府市はまさに世界に誇れるべき国際観光温泉文化都市であり、数多くの留学生たちが何の違和感もなく地域に溶け込む、国際的な学園都市でもあるのです。常に

世界的な観光温泉都市であるというアイディアを、行政・民間・市民がまず改めて共通認識する。そこを基盤に全市民的な取り組みによって、すべての経済活動および文化活動がONSENツーリズムのまちづくりの一環なのだという仕組みをつくるのが最大の特徴といえる。同プロジェクトの本質はまさにそこにある。「ONSENツーリズムのまちづくりは、別府市を挙げた総合産業なのです」という浜田市長の言葉が、それを端的に物語る。

別府市はそのために平成17年4月1日付けで大幅な機構改革を実施。市の基幹産業である観光全般をそれまで統括していた観光経済部を廃して、ONSENツーリズム局(後にONSENツーリズム部)を発足させた。前述「別府観光推進戦略会議」の提言を具現化したもので、ONSENツーリズム部は現在、

温泉課・商工課・農林水産課・文化国際課・観光課・競輪事業課の6課を包含するに至った。「温泉・観光・農林水産・文化・国際交流」の主要諸部門が連携・集中し、常に横断的な判断でONSENツーリズムのまちづくりにまい進することを機能的に明確にした。



江戸時代から行われてきた温泉熱活用の地獄蒸し料理の体験施設(地獄蒸し工房)



各国の留学生が顔をそろえる立命館アジア太平洋大学のミーティングスペース

「おもてなしの心」で遠来のお客さまをお迎える美風を全市に植え付けてくださった油屋熊八翁の教えは、現代において世界から来る留学生に対しても発揮されています。温泉を核に培われ、はぐくまれてきた別府の歴史・文化は、世界の多文化が共生しながらも、なおかつ伝統的な温泉情緒を色濃く残すという、現在の別府の姿を構築する原動力になったといえます。ONSENツーリズムの心(基盤)もまた、その「おもてなしの心」なのです」(浜田市長)

ツーリズムはかつて観光や観光旅行と訳されるが多かったが、ご承知のようにエコ

総合産業としての ONSENツーリズム

ONSENツーリズム部設置を含む大幅な機構改革を実施し、別府市はいよいよONSENツーリズムのまちづくりを本格的に始動する。総務省が平成19年度〜22年度に掛けて実施した「頑張る地方応援プログラム」に応募し、その趣意書には「歴史風土を活かしたまちづくり」を基本に、総合産業としてのツーリズム(ONSENツーリズム)を地域住民との協働により推進し、「住んでよし、訪れて



別府国際観光港第4埠頭に横付けした大型国際クルーズ船の勇姿

別府市が10年来展開してきたONSENツーリズムのまちづくりが、今春から始まったエンタテイメントシティ・別府プロジェクトによってさらに進化を図りつつある概況をここまでご紹介してきたが、今回の取材で改めて強く印象に残ったのは立命館アジア太平洋大学のキャンパスの雰囲気だ。アジア・アフリカ・中東・欧州・北米・南米・オセアニアの80を超える国と地域から約2500名の

世界に羽ばたくか、別府のDNA



ONSENツーリズムの一環として随時開催される「音楽のあふれるまちづくり」がコンセプトの「音泉タウン音楽会」

よし』のまちづくりに取り組むこと」が明記された。
この事業で具体的に実施された成果目標および、そのために実施された各種事業は次の通りだ。

〔成果目標〕

◇別府の地域資源を地元ガイドにより案内する「別府八湯ウォーク」への参加者の3割増／まちづくりに取り組む団体・個人数を6割

増／別府八湯文化の発掘と情報発信事業(各種HPのアクセス増)／年間観光客数の2%増加／外国人旅行者宿泊者数の25%増加

〔実施事業〕

◇地域通貨(泉都)モデル推進事業等各種まちづくり推進事業／温泉道段位認定事業／油屋熊八市民学校事業／ONSENツーリズム研究事業／各種誘客推進事業／各種祭礼・イベント支援事業／内外観光客の長期宿泊実現にまつわる各種事業(観光ルネサンス事業)／音泉タウン推進事業ほか

これらの各種まちづくり事業を通して、全市を挙げて取り組む総合産業としてのONSENツーリズムのまちづくりへの認知度は、市職員はもとより、市民にも民間にも飛躍的に高まったといえる。

同時に外国人留学生のボランティアガイド養成事業は、近年、別府国際観光港への相次ぐ大型国際クルーズ船寄港に際して多大な効果を発揮している。今年度の大型国際クルーズ船の寄港は、予定が取り消されているが、浜田市長は「決して悲観しない」と語る。

「多感な時期を別府市で暮らし、市民に溶け込み、温泉を愛し、大型国際クルーズ船が寄港する際には、留学生ボランティアたちが大歓迎で出迎え、さらには市内を案内し、帰国されるときにはみんなでお見送りするというスタイルは、今やアジア全域の観光業者の間でも話題になっています。今はクルーズ船が減少していますが、これまでに別府を訪れ

留学生(国内学生は約3000名)が集まるキャンパスは、まさに外国と日本が無理なく混交する多文化共生社会の様相だった。それぞれに異なる文化的・政治的背景を抱えつつ、国の枠を超えてフランクに議論したり、勉強し合ったり、若者特有の他愛ないおしゃべりに夢中になったりしている。日本人も含む学生たちのそんな様子を見ると、夢物語とされがちな「世界平和」が決して夢想ではないという気さえしてくる。やはり留学生の多い別府大学なども含め、別府市が世界に向けて開かれた窓になりつつあるという現実を、改めて目の当たりにする思いがした。

「ONSENツーリズムのまちづくりはエン

タテイメントシティ・別府プロジェクトの開始で、新たな段階に入ったとはいえます。しかし、道はまだ半ばにも達していません」という浜田市長だが、今は健康増進の為に温泉を活用し



国の重要文化的景観の「別府の湯けむり」(鉄輪地区)



別府の湯はさまざまな楽しみ方をされている



別府竹製品協同組合が商店街に設けた竹工房での竹製品づくりの実演(写真は大橋重臣さん)

た方たちは必ずや、また別府に行きたいと考えておられると信じています」(浜田市長)
別府観光の父・油屋熊八翁は若き日のアメリカ放浪体験から、ホスピタリティの素晴らしさに目覚め、それを徹底した「おもてなしの心」として、別府観光に根付かせたとされる。熊八翁の衣鉢を継ぐONSENツーリズムの基本精神「おもてなしの心」には、舶来のDNAが潜んでいるのだ。それを今、別府を第2の故郷とする外国人留学生たちが、母国からの観光客に対し自然に発露している。まさに歴史的な好循環、といえる。

た長期滞在型観光や、まち全体がジオパークともいえる環境を生かした別府まるごとONSEN博物館構想など、別府市ならではの独自の計画も数多く控えている。その行方はまだ予測さえつかないが、世界に着々と広がりつつある「国際的視野を持った別府育ちの若者たち(卒業生および在学生)」のネットワークと今後、本格的にリンクし合ったとき、確実に大きな新段階を迎えるだろう。

繰り返しになるが、それは同時に、油屋熊八翁が別府に植え付けた精神的DNA(おもてなしの心)が世界に羽ばたく(還る)瞬間、といえるのかもしれない。

(取材・文 遠藤 隆)